

震災と図書館活動

【報告】

静岡大学附属図書館における地震対策 吉岡文 (静岡大学学術情報部)

1. 静岡大学附属図書館

静岡大学は静岡県の静岡市(駿河区, 人文社会科学部・教育学部・理学部・農学部), 浜松市(中区, 情報学部・工学部)の二つのキャンパスがある。令和元年度の教職員数は1,152名, 学部と大学院を合わせた学生数は10,141人であり, 中規模の国立大学法人である。

両キャンパスの学生数などはほぼ同規模であるが, 主に静岡キャンパスに文系の学部・研究科があることから附属図書館の蔵書数は本館(静岡):906,257冊 浜松分館:299,273冊(令和元年度現在)と違いがある。

『静岡大学附属図書館自己評価書』(平成31年3月, p44)において「東南海地震による被害が想定される地域にあって, 地震対策は必須である。静岡本館・浜松分館とも, 建物の耐震化, 自動入退館装置による滞在者の把握, 書架, 机等什器類の固定と書架への振り分けチャネルの設置による倒壊防止などの対策を講じている。静岡本館では本の落下防止に, 閲覧席付近の書架に傾斜棚の導入も行った。また, 全学防災訓練やキャンパス内の通信訓練などを通じて, 日頃から職員の訓練も実施しているほか, 館内展示を通じて, 利用者に対して防災への意識付けも行ってきた。」と記載しているように, 大学の立地の特徴から大規模地震を主眼とした災害発生時の対策を行ってきた。

2. 入退館システムによる在館者管理

本館・分館ともに入退館ゲートを設置し, 入館と退館の両方で学生・教職員はICカードの身分証による認証を行い, 在館者管理を行っている。



地震発生等により停電した時には, システムから在館者リスト(学籍番号・氏名)が自動的にプリントアウトされるように設定されている。例年実施される全学一斉地震防災訓練の際にはリストを手動で出力し, 訓練時に図書館内に滞在していた利用者一人一人の安否を確認している。

3. 静岡本館の書庫入退室システム

静岡キャンパスは山の斜面にあり, ふもとから一番高いところにある人文社会科学部までは100メートル近い高低差がある。図書館はキャンパスの中ほどにあるが, 斜面に沿った7階建てとなっている。正面玄関やカウンターは4階, 1~3階が書庫, 4・5階に閲覧室や開架書架がある。書庫内は通路が狭く, 階段は傾斜が急な上, かなり入り組んでいるため, 入庫利用は原則として教職員・大学院生に限定している。



入出庫の際には書庫入退室システムでICカードによる認証を行うことで, 書庫内にだれがいるか, 現在何人入庫しているかを把握している。

書庫利用者は必ず防災バッグ(館内地図, 懐中電灯, ホイッスル)を身につけることになっている。

書庫内には各階のエレベータや階段付近にヘルメットと懐中電灯を設置しているほか, 書庫内書架付近には懐中電灯にもなる足元灯を置いている。書庫内エレベータには帰宅支援キット(ライト, 簡易トイレ, ホイッスル, 水, カロリーメイト)を常備している。



4. 浜松分館リニューアル：非常用設備

浜松分館は老朽改善・機能回復のため、2012年より改築・改修工事を行い、2018年6月にリニューアルオープンした。図書館のほかに事務部門や学生支援機能を融合させた複合施設 Student's PORT として整備し、学生支援部門を集約することで、ワンストップの学生サービスを実現させている。附属図書館では待望のラーニングコモンズを整備するなど、学生の多様な学習スタイルや行動を支援する機能を備えている。

この建物は浜松キャンパスの正門を入ってすぐのメインストリートに面していることもあり、非常時には災害対策本部として機能できるよう屋外災害拠点に必要な機能が整備された。



なにげともなければ1階「読書テラス」は、緑に囲まれた屋外で読書を楽しんだりくつろいだりする場所であるが、防災パーゴラやかまどベンチ、仮設便所の設置が可能となる排水溝、屋上に設置したソーラーパネルによる非常用電源などを整備してある。雨水利用設備によりタンクにためた雨水の利用も可能であり、学生・教職員はもとより、学外からの避難者受入れにも対応できるよう配慮している。

【報告】

三重短期大学附属図書館 防災取り組み事例から
中澤利美（三重短期大学附属図書館司書）

● 大学紹介

本学は、1952年開学の津市を設置母体とする公立短期大学で、1学年約350名の小規模大学であり、附属図書館は、小施設ながら、約20万冊の資料を所蔵している。平成11年度より、施設を地域開放しているが、附属図書館の学外利用者は3%程度で、ほとんどが学内利用の図書館である。

また、学生との距離が近いアットホームな図書館で、としょかんガチャ、謎解きゲーム、BOOK CAFEなど、アットホームさを活かした企画も行っている。学生向け図書案内の「こんな本読んでみて」は、A5サイズにするなど、昨年全面リニューアルするなどして、学生にとって敷居の低い図書館を目指している。

● きっかけはどこにでも。

平成27年公共図書館から大学図書館へ異動となり、学校における2大危険な場所が、図書館と実験室であると知る。そこで、平成27年度図書館ボランティアサークルの学生と一緒に防災の取り組みを開始、館内ハザードマップの作成、図書落下防止テープとガラス飛散防止フィルムの施工、緊急用呼び笛の設置などを実施した。しかし、ひととおりの終わると、少しトーンダウンといったところであった。

そのような中で、平成30年度三重県立図書館開催の危機管理研修が開催された。危機管理に対する意識、自館で考える重要性を改めて実感し、早速、三重短大の問題点の洗い出しを開始した。

● 3無の図書館、防災に取り組む。

(1) 場所がない

当館は、玄関ロビー、会議室など、開架スペース以外の施設はなく、事務所兼書庫は、図書館を出て、外を歩いて行き来する場所にある。

そこで、イベント、勉強会などを開催する際は、昼休み、補講日や長期休暇中の利用者が少ない日時を選び、開架スペースで開催している。通常利用者に影響がないとは言えないが、今のところ、苦情はない。入館時に声かけし、そのことをPRの機会としてとらえている。



(2) 人がいない

イベント等の企画については、職員1人で出来るオペレーションを検討、実施している。不測の事態には、企画進行の1人を、カウンター担当の1人が後方支援できるようにするなど、職員の動きを概ね企画段階で想定している。

次に、落下防止テープ等の施工作業については、図書館ボランティアサークルの学生と一緒に、2年をかけて実施した。人手になってもらえることはもちろんだが、学生自身の防災意識が高まり、自分たちの図書館であるという意識を持ってもらえる効果は、プライスレスな効果があったといえる。

(3) 予算がない

ア グッズ

1 館内ハザードマップ（作成と更新）

図書館ボランティア部の学生とともに作成し、更新している。図書館職員がファシリテーターとなり、共に考え、勉強していくことで可能になった。

2 救急セット（簡易用、災害対策用）

カウンター用簡易セットから準備を開始した。災害時はもちろん、危機管理対策として、利用者の体調変化等に初期対応できるものを手作りました。

次に、図書館事務所に配置している救急セットは、災害時も対応でき、持ち運びできるように作成した。看護師から最低限備えた方がよい物のリストアップなど、専門的な助言を受け、一部の簡易医療用具を図書館分として配置してもらうことで可能となった。また各用具を入れるリュックサック、足りない消耗品は、100円均一ショップで購入した。

このように、自分たちの手で集め、作っていったことで、各用具を確認することができたのも、職員にとっては大きな収穫だった。

3 フローチャート（職員用）の作成

職員によるポイントの洗い出しと、学内での確認、調整等、簡易な文書作成ソフトのみで、作成できる。

作成開始時は、あまりの疑問点の多さに途方にくれることも多々あり、作ることの簡易さと考えることの多さというギャップが一番大きい作業だった。あらゆる状況や場面を考えるだけでも危機管理の一助となること、考えるきっかけが日々館内にあることに気づけたことを、今後に活かしていきたい。

イ 企画

1 「BOUSAI ポーチ いつも×もしも」

机の脚元に配置してある非常用呼び笛について、実際に学生が机の下をのぞき込むところまでは、なかなかできず、何とか防災を自分のこととして、向き合って考えてほしいと考え立案した。

内容は、普段持ち歩く鞆に入れておける簡易防災セットを、自分用にカスタマイズし、ポーチに入れて作る講座である。広報の際に、「簡易防災セット」と呼ぶよりも、少しでも身近に感じてもらうと「BOUSAI ポーチ」と命名した。

他課や他の機関から提供してもらったノベルティ、100円均一ショップで購入のグッズ、用意できないグッズは、アイテムカードとして作成することとした。



2 「BOUSAI ゲーム

あなたならどちらを選ぶ？」

阪神淡路大震災の後に、実際の声を元に作られたカードゲーム（クロスロード）を、地域の方も参加してもらうことで、実際に近い議論ができるのではないかと立案した。募集は、公共図書館にポスター掲示を依頼するなど、学外からも募った。

カードゲームは、防災関連部署から借受け、講師は、地元NPOの代表にゲームのファシリテーター

ターを、災害に関する専門的総括を防災関連部署の職員に依頼した。

その結果、予算としては、ファシリテーターへの外部講師料のみで開催可能となった。

3 館内ハザードマップ等の展示

図書館ボランティア部とともに作成したハザードマップを、実際利用する学生に見てもらおうと立案した。学生自身が考え、それが形になることで、作った学生の意識に変化があることはもちろん、図書館を利用する他の学生にとっても、今いる場所が、防災の視点で可視化されることにより、身近に考えるきっかけになればと考えている。

4 県内一斉キャンペーンへの参加

平成 23 年度に始まった観光による復興貢献を目的とした三重県立図書館、県内図書館との連携展示「東北を知ろう、東北へ行こう！」(平成 28 年度より「知る、行く、つながる。熊本・大分と東北」に変更)に参加している。継続して参加することで、風化させない、毎年考えるきっかけとしたい。

● 今いるここで。未来の防災のためにできること。

グッズやフローチャートを作成したり、企画を進めていると、様々な場面で、今、ここで災害が起こったら、私は動くことができるのか、声を出すことができるのかを考える。また、ここで、誰が、どんなことができるのか？という問いにぶつかる。

それと同時に、高等教育機関という性質上、これから、社会や地域で、防災に取り組み、進めていく担い手となる学生たちに、どんなことを感じてもらえるのか、考えてもらえるのかは、図書館に課せられた使命である。

「図書館にあるのは本だけじゃない」

これは、平成 28 年度当館図書館キャンペーンのシリーズポスターの一枚に書かれたキャッチコピーである。災害に関する資料を提供することはもちろん、その外側にある何かを、伝え続けていきたい。

防災に関する取り組みは、終わりが無い。当館の取り組みも、どれも小さなものばかりで、学生からの反応が全くない取り組みも多々ある。

しかし、反応に一喜一憂することなく、結果を活かし、本学においてより効果的な方法、今の在學生に届く企画を積み重ね、これからも三重短大に合わせたオーダーメイド防災に取り組みでいきたい。

【報告】

倉敷市立真備図書館の豪雨災害と復興事業 藤井広美 (倉敷市立真備図書館)

1. 真備図書館のあらまし

真備図書館は、吉備郡真備町立図書館として、2000 年 7 月 13 日に開館し、2005 年 8 月に倉敷市と合併した際に、倉敷市立真備図書館となった。特色の一つとして真備町が、横溝正史の疎開先であったため、横溝正史に関する図書・DVD 資料 877 点を所有しており横溝コーナーを設けていた。

2. ハザードマップを生かすには

ハザードマップには、100 年に 1 度の確率で 2 日間に 225 mm の降雨があった時に、2 階の軒下以上が浸水する可能性があることを示した紫色の表示が、小田川の両岸に広がっている。

平成 30 年 7 月の西日本豪雨は、5 日・6 日の 2 日間で小田川上流に 217 mm の降水があり、7 日の朝にも 74.5 mm の降水により想定以上の降水量となり、小田川の支流高馬川・末政川から決壊した。これにより平屋の屋根を超える浸水となり、亡くなった人の 8 割が自宅の 1 階で亡くなっていた。

「2015 年 9 月の常総市の水害は、利根川の水位が高く、鬼怒川が流入できなかったことが一因です。小田川でも同じことが降水量によっては起こります。避難場所を確認してください。」という表示をカウンターの横に貼っていたハザードマップにつけていたが 3 年後に現実となってしまった。ハザードマップを知らなかったという人も多くもっと何か広報の手段があったのではないかと思うと残念でならない。

3. 倉敷市立図書館の被害

蔵書は、平成 30 年 4 月現在、図書 134,300 冊・視聴覚資料 3,100 点あったが、平成 30 年 7 月豪雨で、床上 320 cm の浸水により開架・書庫合わせて、館内にあった図書：約 122,000 冊 視聴覚資料：約 2,600 点 雑誌：訳 2,400 冊 計 127,000 点(横溝文庫：838 冊含む)が水没した。併せて、真備地区の利用者などが借りていた資料 3,350 点と、予約・返却・装備が済んだばかりの寄贈本など 1300 冊が水没した。

被災後数日して館内に立ち入ったところ、天井が落ち、壁はカビが生えて、窓ガラスも割れており、一部書架も

倒れ本が散乱するなど悲惨な状況となっていた。本が吸水し膨れており再生不能と判断し、書架も本を棚から出すために全部壊して廃棄した。

4. 被害状況の説明（写真にて）

5. 携帯電話の有用性と連絡方法

8月から予約の連絡をしようと試みたが、水没していない地区を含め、真備地区全体で固定電話が使えなくなっていた。固定電話のみ登録している利用者が多く、携帯電話の登録の必要性を改めて感じた。また、予約の本を借りに来られるかの連絡を葉書で送ったが、葉書の文面も被災者に配慮したものに変更した。

6. 情報の収集と発信

被災前に、真備地区は、水害の危険が考えられるので、倉敷市の防災対策室に避難準備情報や、避難勧告が発令されたときにできる対応を電話で確認し「避難所は自家用車で避難すると駐車場がない。車で避難するとき（高齢者の避難）は、総合公園や、クリーンセンターなど広い駐車場があるところのほうがいいのではないか。」と言われた。また、開館中に避難情報が出た場合、どのように誘導するかを職員と相談していた。今回は深夜に被災したので利用者がいなかったのは幸いであった。

7. 復興事業

昨年12月から仮設住宅など真備地区への移動図書館車の運行開始。本年7月23日から真備公民館で仮設真備図書館開館し一部図書館業務を再開した。